

巻頭言

オンラインによる、エポックメイキングな「第40回」大会

清水知恵（前編集委員長・福岡教育大学）

2020年度は、COVID-19の蔓延で、100年に1度といわれるパンデミックに染まった1年であった。しかし、その状況下で、舞踊教育研究会の第40回大会は12月19日土曜日、無事に終了した。オンラインでの初の試みであった。40年前に、“Zoom”で大会運営することになる日が来る事を、誰が想像していたであろう。私は、たまたま、本大会の新しい試みである「研究プロジェクト」のメンバーになったことから、実行委員会の活動を見守る機会を得た。今回、その立場で感じたことを中心に所感を記したい。

参加学生数データで比較してみると、例年（前回、岡山大会）は337名であったが（確か、岡山大会も例年より多く参加していたはずであるが）、今年度は392名であった。ダンス作品に出演した学生数は前年比で、16.3%増加している。教員の全参加者数は31名で、「プロジェクト研究」参加教員数は21名、運営した私たち7名を加えると30名近い研究新企画への参加があった。喜ばしいことである。

まず、今回の大会で注目の企画に、藤田善宏氏と橋本有子氏をお招きしたワークショップがあった。両方とも大変評判が良かった。私は、橋本氏のクラスに参加した。レクチャーも実技も非常に楽しかったが、意識的に動きながら自己の内と外の空間を繋げていく、氏のソマティック・ムーブメント研究の方向性には特に共感した。

そして、今回の目玉として緊急企画「研究プロジェクト」があった。この企画の意図は、今年度のダンス授業実践を振り返り新たな時代のダンス授業実践につながるヒントを探ることであった。会員への調査結果を踏まえ、参加者がグループ・ディスカッションを行った。また、チャット機能やブレイクアウトルーム等を用いることで、運営上、容易に多くの参加者からの意見を集めることもできた。参加者においても、お互いが意見交換しやすい場であったと感じた、との感想があった。

さらに、注目すべき企画に「ダンス作品」のオンライン上演があった。この発表会では、映像ならではの作品が多くあり、舞台ではできない演出や編集技術が駆使されており、見ごたえのある作品が多かった。私の個人的な感想であるが、中でも、愛知教育大学の「授業作品」は本当に授業の大学生なのかと思うほどの出来栄で驚いた。2回見てしまった。ダンス部も少し入っていたとのことであったが、少し入ったくらいでこのようになるはずはない。福岡教育大学ダンス部も、他の授業作品やダンス部作品もかなりの編集技術を駆使して挑んだはずなのであるが、目線が全く異なった作品であった。使える演出や装置などを駆使し、ダンスの「今・ここ」ライブ感と、「オンライン」というステージ条件を理解していた。しかも、編集技重視の仕上がりではなく、みる者がどこにどんなスピードで連れて行ってくれると心地よいのか知っていて、プロ並みのカメラワークで、今できる最高の作品に仕上げていた。観客を座っている椅子ごと自在に動かし空中にまで連れて行ってくれたような印象を受けた。ドローンも駆使していたそうである。また、思わず笑ってしまうウィットに富む時空間運びもセンスがよく、間の取り方も優れていた。また、動きがいわゆるリズム系ダンスの型にも、他の既存型にも全くはまっていない点も良かった。そして、何よりも素晴らしかったのは、そのような技術の上に、出演者全員が心底楽しんでいるのが伝わってきていたことだ。きっと彼らは仲が良いのであろう。大変な練習も楽しかったに違いない。大きな喜びを持った創造プロセスが生み出す作品に叶うものはない。これからこの会が目指す世界が見えたような気がした。心地よい爽やかな風が通り抜けた、鮮やかな一瞬であった。

今年度の実行委員会の準備には、例年にはない大変な苦勞があったと思う。コロナ禍でのいつもと違

う状況で、かつ各自の日々の仕事もある中、膨大な準備時間とやりとりがあったであろう。しかしその結果、実行委員全員の力を集結し、最後まで無事に運営ができた。評判はよく、盛会であった。本研究会会員の皆様を代表して、お礼を申し上げたい。実行委員の先生方、本当にありがとうございました。

実行委員に、上記の他、オンライン運営を体験して良かったことを聞いたところ、以下があげられた。通常大会では得られない達成感、授業ではできない技術的にも高い経験値、これらを得たこと、また、オンライン対話によって、通常出会えない、多くの教員や学生たちと出会えたことなどがあつた。

オンラインについては私自身も、2020年前半、全授業オンライン実施の体験をした。舞踊はライブが命なのは間違いないのであるが、オンラインでの創意工夫の連続の日々は、今まで、感じたことのないやりがいと達成感を感じた。危機に接し、明日やっつけていけるのかと思う、瀕死とも言える状態は、新しいものを生み出すのに必要な強烈な創造エネルギーを生み出すのだと言うことを体感した半期であった。

私は、実技のオンラインで特に良い点は、4点あると思う。1つ目には、どのような授業や講習を行うにしても、企画場所から離れた、たとえば九州にいる私のような人も企画に参加しやすい。2つ目として、関節や指先の動き、息を吸っているのか吐いているのか等、動きのディテールまでが見える。これは、体育館で通常離れた場所に学生がいる状況では決してできない学習である、動きの質感を向上させる授業になる可能性を含んでいる。3つ目として、オンデマンド配信では動きを巻き戻したりできる。個別対応のペースで覚え、次週の子習もできる。対面時には既に覚えているため、様にならないことを恥ずかしく思う必要がない。4つ目は、画像を指導者や講師に提出する場合も、1対1対応で指導者や講師に見せるだけであるため、恥ずかしさがほとんどなく学習ができる。こういったことであろうか。

今年度で大会は40歳になり、そして、舞踊教育学研究は20歳になる。同じ教育学系協会保健体育部門でも初めはいくつかの研究会があつたが、途中、諸般の事情で、活動は断念したと聞いている。しかし、この研究会は続いてきた。多くの会員の想いを内包し、万難を排し、さらにこのコロナ禍にあつても、本年も継続されている。驚くべきことである。他のどの部門もなし得なかつた活動を実現している。この実現は、これまでバトンを受け渡してこられた、一人一人の情熱とエネルギーの集積に他ならない。

私は、本研究会には舞踊教育学研究創刊号から何度かお世話になった。そのことは、自分がドクター論文に挑戦する土台を形成する契機となつた。しかし、論文を投稿し審査を受ける身であつた私が、まさか巻頭言を書く立場になるとは想像していなかつた。随分時間が経つたのを感じている。

この第40回大会は記念すべき大会であつた。ここまでの歩みを経て、本研究会が必要としている課題については、40年の活動詳細と成果とともに、先行の文献に纏められている(細川, 2018; 松尾, 2015; 村田, 2015; 高橋, 2015, 2018, 2019; 茅野, 2019)。これらの課題について、現役生である私たちは互いを尊重しながら信頼関係を築き、調和を保ちつつ、解決方法を考案し、これから次の歴史の1ページを丁寧に紡いでいく必要があるであろう。今は、ちょうどその転換期ではないかと考えている。

参考文献

- 細川江利子 (2018) 猪のように、韋駄天のように、前に進め!—新学習指導要領に即したダンス指導の充実と発展を目指して: 巻頭言. 舞踊教育学研究 20: 1-2.
- 松尾千秋 (2015) 教員養成段階におけるダンスカリキュラム: 巻頭言. 舞踊教育学研究 17: 1-2.
- 村田芳子 (2015) 今こそ「ダンスの学び」をすべての子どもたちに—ダンス必修化を機に求められる指導力の向上: 巻頭言. 舞踊教育学研究 16: 1-2.
- 高橋和子ほか (2015) 平成 26 年度文部科学省委託事業 武道等指導推進事業 (武道等の指導成果の検証) 中学校における柔道・ダンスの指導状況等の調査 [報告書]: 1-78.
- 高橋和子 (2018) 日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門 舞踊研究会の成果と課題: 記念論文. 舞踊教育学研究 20: 3-12.
- 高橋和子 (2019) 持続可能な開発目標の達成に貢献する質の高い教育の実現に向けて: 巻頭言. 舞踊教育学研究 21: 1-2.
- 茅野理子 (2019) 機関誌『舞踊教育学研究』の成果と課題: 記念論文. 舞踊教育学研究 21: 3-12.